

京都教区時報

カトリック京都司教区
広報委員会

京都市中京区
河原町通三条上る

TEL 075-211-3025

FAX 075-211-3041

honbu@kyoto.catholic.jp

<https://www.kyoto-catholic.net/>

2026年 司教年頭書簡を受けて



©Vatican Media

第9回 聖霊に仕える教会

教会は聖霊の力によって生かされています。聖霊はすべての秘跡の中に存在し、聖霊の内的な働きを示す外的なしるし（実）は愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です（ガラテヤ5・22-23）。

ヨハネによる福音書の中に「父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。この方は、真理の霊である」（14・16）という言葉があります。この真理の霊の光が人間の心を照らすと、その人は自分の尊厳、価値を見て分かるようになります。そして地上に生きる目的と基本的な原則が理解できるようになります。

すなわち、一番目は、私たちは神をかたどって、神に似たものとして造られていますから、私たちは神の子どもだということです。二番目は、神はご自分で造られた人間を愛しておられるということです。私たちの罪を償うために自分の息子であるイエスを世に遣わされて、十字架の刑を受けることを許されました。三番目は、人間の魂は、永遠に生きるといことです。神は私た

ちのために、天の国に住む所を用意してください。さっています。

私はこの福音書の真理の霊についての言葉から、インドの物語を思い出します。ある日、三人の盲人達が道を歩いていたら、突然、壁のようなものにぶつかり、彼らの道をさえぎりました。それは象でした。象の足を触った人は、「木の切り株ではないか」と言いました。つぎに象の牙に触った人は「鉄の棒ではないか」と言いました。最後の人は動いた鼻を触ったので「これは大きな蛇だ」と言いました。部分的な感触だけでは、象だとは分かりませんでした。

目が見える人が象を見れば象だと分かるように、私たちもこの世に生きていると聖霊の光のおかげで神の真理が理解できるようになります。ですから、いつも祈りながら聖霊の光に心を開きましょう。

エスコラピオス修道会司祭 アダム・クジャク

大塚喜直司教年頭書簡
「教皇レオ十四世 希望と一致の橋をかける牧者」



10
2026



サン・ピエトロ大聖堂「聖霊の窓」



京都教区90年、そのはじまり

— 祈りと決断、戦争の中で受け継がれた信仰 —

京都司教 十パウロ大塚喜直

第2回 メリノール宣教会、日本へ — ウォルシュ神父が見つめた「日出ずる国」 —

第1回では、大阪教区のカスタニエ司教が、京都・滋賀に新たな宣教区域を設け、別の宣教会に委ねようとしていた構想をたどりしました。しかし、この時点では、まだその呼びかけに応える宣教会は決まっていませんでした。その願いは、やがて太平洋を越え、アメリカへ届くことになります。今回は、メリノール宣教会と、その共同創始者ジェームズ・アントニー・ウォルシュ神父 (James Anthony Walsh, M.M., 1867-1936、後に司教) に目を向けます。京都教区誕生への道は、日本の教会の願いと、アメリカで育まれた海外宣教への志とが出会うことによって、少しずつ現実へと近づいていきました。

メリノール宣教会の誕生

「メリノール (Maryknoll)」とは、「マリアの丘」を意味します。その名は、ニューヨーク州オシニング近郊の丘に置かれた本部に由来しています。1911年、ウォルシュ神父とトマス・フレデリック・プライス神父 (Thomas Frederick Price, M.M.) は、アメリカの教会も海外宣教の使命を担うべきだとの願いから、メリノール宣教会を創立しました。それまで宣教師を迎える側だったアメリカの教会が、自ら宣教師を送り出すようになったのです。初代総長となっ

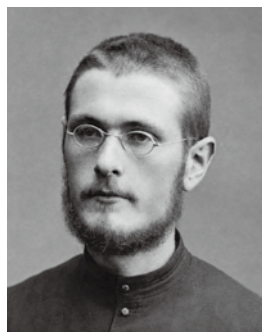


メリノール宣教会
共同創始者
ジェームズ・アントニー・
ウォルシュ神父

たウォルシュ神父は、会員たちを中国、韓国、満州などへ派遣しました。しかし、日本本土での宣教は、まだ開かれていない新しい扉でした。

ウォルシュ神父と日本との出会い

ウォルシュ神父が日本へ心を向ける契機の一つとなったのは、パリ外国宣教会のジャン＝バティスト・ジョゼフ・デフレンヌ神父 (Jean-Baptiste Joseph Deffrennes, M.E.P., 1870-1958) との出会いでした。1917年10月12日、最初の東洋視察旅行で福島を訪れたウォルシュ神父は、デフレンヌ神父のもとに宿泊し、日本における宣教の現状について語り合いました。その折、日本、すなわち「日出ずる国」へ宣教師を送るよう勧められたと伝えられています。この出会いは、ウォルシュ神父の心に、日本への深い関心を刻みました。



パリ外国宣教会
ジャン＝バティスト・
ジョゼフ・デフレンヌ
神父
写真：パリ外国宣教会
史料研究所 (IRFA)

京都・滋賀への道

1929年、計画は大きく動き始めます。東京に立ち寄ったウォルシュ神父は、後に駐日教皇使節となるエドワード・アロイスウス・ムーニー大司教と会見しました。日本の教会の事情について助言を受ける中で、ウォルシュ神父は、メリノール宣教



第3代中日教皇使節
エドワード・ムーニー
大司教
写真：デトロイト大司教区
公式報道機関
Detroit Catholic

会に託される使命を見いだそうとしました。ムーニー大司教は、同会にふさわしい宣教区域を日本国内で探すことを約束します。その後、カスタンエ大阪教区司教との協議を経て、新たな宣教地として示されたのが、京都と滋賀でした。古都・京都と琵琶湖を抱く滋賀。長い歴史と豊かな文化、深い宗教的伝統をもつこ

の地域が、メリノール宣教会の新たな宣教地として浮かび上がりました。こうして、ニューヨークの「マリアの丘」から、太平洋を越えて京都・滋賀へ向かう道が少しずつ輪郭を現します。まだ互いをほとんど知らなかったアメリカの宣教会と日本の古都が、神の導きのうちに静かに結ばれようとしていました。この歩みは、1937年の京都使徒座知牧区（Apostolic Prefecture of Kyoto）の設立、1939年の奈良県・三重県の編入を経て、後の京都教区への礎となりました。

宣教は、出会いと識別から始まる

宣教は、宣教師が現地に到着したときに初めて始まるものではありません。地域の必要に耳を傾け、託された使命を祈りのうちに識別するところから始まります。宣教師は、神のおられない場所へ神を運ぶのではなく、すでにその土地の人々の暮らしや喜び、悲しみのうちに働いておられる神に出会い、そのみ業にともに仕えるために遣わされるのです。ウォルシュ神父も、多くの人との出会いと対話を重ねながら、日本へと招く神の呼びかけを一步步ずつ確かめていきました。

神が備えておられた道

京都教区の歩みは、一人の宣教師や一つの宣教会の働きだけによって始まったものではありません。さまざまな人々が神の導

きに応え、それぞれに託された役割を担い、力を合わせるなかで、宣教の道は少しずつ開かれていきました。京都教区の原点に息づくこの協働の精神は、今日、私たちが進める共同宣教司牧にも受け継がれています。それぞれが自らの召命と賜物を生かし、地域や世代の違いを越えて互いの声に耳を傾け、支え合いながら、神が今も備えておられる道を共に見いだしていくことが求められています。

次回は、メリノール宣教会が日本派遣を正式に決断し、最初の宣教師たちが期待と不安を胸に太平洋を渡るまでの歩みをたどります。



ニューヨーク州オシニングの丘の上にある
石造りのメリノール神学校とアジア風の野原



メリノール会の紋章

写真の出典の表記がないものについては
メリノール宣教会アーカイブより



京都チエジュ姉妹教区交流21年

京都教区とチエジュ教区は、2005年6月7日に姉妹教区の縁組をし、司祭・神学生・信徒間の交流を行っています。

昨年は姉妹教区20周年を祝いましたが、今年も様々な交流が行われました。

1月 シンソン女子学院交流

チエジュ教区の唯一のカトリック学校であるシンソン女子学院の先生や生徒たちが京都を訪問し、大塚司教に挨拶をするため、河原町教会にいらっしやいました。

そして、ノートルダム女学院中学高等学校（現・洛星ノートルダム女学院中学高等学校）との交流が行われ、ホームステイや京都観光をして日本の学校生活や文化を体験されました。

この交流は、2010年から行われていて、昨年12月にはノートルダム女学院の生徒がチエジュを訪問されました。



5月 チエジュ巡礼

京都教区では、毎年5月にチエジュ教区の聖地「恵みの丘」で開催される「聖母の夜の集い」に参加する巡礼を行っています。この巡礼は、両教区の信徒同士が交流を深める貴重な機会となっています。

主がくださった二重の喜び

5月27日より4日間、主は私たち17名に、チエジュ教区の兄弟姉妹を通して、多くの恵みをお与えくださいました。

チエジュ空港に到着すると、かつて京都教区で奉仕してくださったキム・テジョン神父様をはじめ、シスター、女性信徒の方々が、プレートを掲げて温かく迎えてくださいました。そこには「こんにちは、ようこそ韓国へ」などと日本語で記されていて、その心遣いに胸が熱くなりました。さらに毛糸で編まれた椿のブローチを胸につけてくださり、首には贈り物として食事用のエプロンをかけてくださいました。

夜、ムン・チャンウ司教様が私たちのために夕食会を催してくださいました。閉会後、司教様は私たち一人ひとりに握手をし、ロザリオの贈り物まで手渡ししてくださいました。

2日目は、チエジュ教区の行事「聖

母の夜」に参列

しました。平日の夜にもかかわらず、三千名もの信徒が集まりました。司教様と神父様方、総勢50名による野外ミサが始まると、強風が吹き荒れ、冷たい霧雨が降ってききましたが、司教様

は熱く説教をなさいました。「私たちは決意しましょう。家族の中に再びイエスを探します。母の心で接します。あきらめず、最後まで愛し続けます」と。

ミサの後には、ろうそく行列がありました。先頭に行くのは、神父様方が担ぐ生花で飾られたマリア様の御像です。その後ろを三千名の信徒と私たちが続きしました。ろうそく型のライトを手に、ロザリオを一環唱えながら歩きます。一時間後、祈りが終わる頃には霧雨も止み、夜空にはおぼろ月が姿を現していました。実は、私は4か月前に人工股関節の手術を受けたばかりで、最後まで歩けるか不安でした。しかし巡礼の仲間が交替で、右脇を支えてくださり、そのおかげで、最後まで歩き通すことができました。



恵みの丘にて 等身大のイエス様と一緒に

3日目には、恵みの丘で「十字架の道行き」の祈りを捧げました。そこには等身大の御像によって、一留から十四留までの場面が再現されています。等身大であるがゆえに、主のご受難が一層リアルに胸に迫ってきました。

続いて、四・三平和公園を訪れ、一九四七年当時の政府によって、島民の十人に一人が犠牲となった悲劇を知りました。韓国国内では長らく語ることが許されず、日本へ逃れた島民の方々によって世界に伝えられたという事実にも、深い思いを抱きました。

故郷である京都教区の兄弟姉妹と共に旅をし、チエジュ教区の兄弟姉妹の堅固な信仰に触れることができたのは、私にとってまさに「二重の喜び」となりました。

6月 京都・チエジュ交流月間ミサ

京都教区では、毎年6月を「チエジュ交流月間」と定めています。

この期間中、教区内の小教区の主日ミサでは、交流促進を目的とした意向を共同祈願に加えて祈り、京都・



前列㊤大塚司教
㊤イ・シウ神父
㊤ゴ・スンゴン神父

チエジュ姉妹教区交流委員会の活動を支援する献金が集められます。
6月28日、チエジュ教区から2名の神父様をお迎えし、司教座聖堂河原町教会において両教区の絆を深めるミサが捧げられました。

7月 チエジュ教区助祭の京都教区研修

今年1月、チエジュ教区では4名の神学生が助祭に叙階されました。新助祭は例年、叙階された年の夏に京都を訪れ、ホームステイや司牧実習などを行います。

7月、グアク・ホギ助祭、オ・ムンホ助祭、キム・ボンジュン助祭の3名が約半月の間、京都に滞在されました（残念ながらイ・ジョンウ助祭は体調不良のため来日できませんでした）。京都教区での日々をサポートするのは、チエジュから派遣されている先輩の神父様たち。ソ・ウォンハ神父とイ・ウォンギユ神父の案内で、京都の観光地にも足を延ばされたようです。3名は多くの学びと交流の成果を携えて、帰国されました。

来年の司祭叙階式に



助祭奉仕 宇治教会ミサ
㊤オ・ムンホ助祭
㊤キム・ボンジュン助祭
㊤司式 菅原神父

向けて助祭の皆さまがさらなる学びを積み重ねられ、司祭叙階の恵みに与られますようお祈りしています。

広報委員会



助祭奉仕 高野教会ミサ
㊤グアク・ホギ助祭
㊤主司式 大塚司教
㊤共同司式 鶴山神父



㊤ソ・ウォンハ神父
㊤イ・ウォンギユ神父



清水寺にて



伏見稲荷にて

第19回 戦争と平和写真展

沖縄、フクシマ、ヒロシマ

8月8日(土)・9日(日)

今年も京都教区カトリック正義と平和協議会主催の戦争と平和写真展を、河原町教会地下ヴィリオンホールにて開催しました。例年になく厳しい暑さの中、延べ約150名以上の来場者を得ました。

沖縄

沖縄の写真には、沖縄本島の辺野古の現在の様子に加え、基地・要塞化が進められている南西諸島の与那国・石垣・宮古・奄美などの現状が新たに追加されました。「台湾有事」対策として近年進められている現状を写真を通して見ることで、より一層身近に感じることができました。



こんな小さな島々の狭い土地で、戦争となったら島民は島に住み続けることができるのか、など訴えられるものがありました。そんな中、美ら海のニモ（カク

レクマノミ）の写真にほっこりしました。

フクシマ

「コンセントの向こう側」というDVDを見ました。コンセントの向こう側に何かがあるか考えたこともなく、コンセントにさせば電気が流れてくることを疑いもなく生活している私たちに、問いかけられた物語でした。

福島原発事故から反省することもなく、再稼働が進められています。今一度あの事故を、まだ終わっていない事として考えなければと思いました。

全編が詩と短歌で構成されている作品で、上映時間は約1時間ですが、原発事故の後、歌人、詩人たちがどのような思いを言葉で紡いでいったかを語りかけていました。

（映像提供／3・11&福島原発事故 伝承アートミュージアム）



ヒロシマ 基町高等学校の生徒

と被爆者との共同制作による「原爆の絵」

広島平和記念資料館より「原爆の絵」をお借りして展示しました。広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの生徒さんたちが2007年より毎年、被爆者が見た当時の光景を後世に伝えていくため、被爆体験証言者とともに「原爆の絵」の制作に取り組んでおられます。今回はこの中の作品60点を展示しました。原爆の絵は当時の惨状を伝え続け、証言活動に活用するために制作されていますが、聴き取りをしながら創作している生徒さんたちにとっても、記憶の継承の一つの形として残り、素晴らしい取り組みだと思いました。

（京都教区時報2025年11月号参照）



来場者の感想

☆今ではすぐに得られる水。それは原爆が落とされたときには人々が集まる程大切なものだということに気づきました。簡単に水が得られるのも原爆が落とされ、苦しめられた人々が平和を訴えたからだと、この絵「水を、水を：求めて」は僕に気づかせてくれました。この絵の作者も被爆者に伝えられて原爆の悲惨さに気づいたのだと思います。このように絵に表すことは、文字では伝えられない戦争の悲惨さや平和のありがたさなどを見る人に伝えてくれます。是非これからもこのプロジェクトを続けてほしいと思います。

(中学生)

☆「白骨化した遺体」という絵を見て、それは血だらけで皮膚がただれている遺体よりも「不気味さ」がより出ていると感じました。また絵にかいてある骨で少し血や肉が残っているように少し赤みを付けているところがさらにリアルに感じ、それを見ている人も、そんなに騒がずにあたかもそれが当たり前だとしているような雰囲気も恐ろしいと感じた。

(中学生)

☆払っても寄ってく
るハエ、異様な
おに群がるウジ。
普通だったら、見
たくも描きたくも
ないようなハエや
ウジなどが描かれ
ていることにより、



一層悲惨さや痛々しさが伝わってきた。すべてのものが、痛々しく戦争の悲惨さが伝わってきて胸が痛くなるものだった。

(中学生)

☆広島や長崎、沖縄で戦争があり多くの死者も出てしまったのに、なぜ基地をつくり戦争ができる状態にするのか疑問に思います。政府の人も絶対わかっていたのに、なぜするのか不思議です。

(中学生)

☆絵は恐ろしさが伝わりやすく、また詳しく様子がわかるので良いと思いました。被爆者の方々がいなくなっても物などで恐ろしさを後世に伝えていくのが大切だと思いました。

(中学生)

☆想像よりもグロテスク、到底生きられないような環境ではないということがわかった。また、家が一瞬で破壊されているのを知り甘い考えが消えた。

(中学生)

☆私も何度か福島に行きました。線量計の音に恐怖を覚えたのを久しぶりに思い出しました。どこかの映画館でもDVDを上映できないですかね。忘却は罪であることを痛感出来る映像でした。

☆何となく感じていた戦争による市民への影響に対する恐れを身近に感じるようになった。戦争反対と思っていても、具体的にどう行動できるかについて考えてみるきっかけになった。現実に行われてい



る戦争の危険を感じられた。

☆戦争はあきません。罪のないたくさんの命が犠牲となります。沖縄の海はともきれいでした。いつまでもきれいなままで残りますように。

☆戦争はあつてはならない絶対に！ 写真展を見て悲しくなりました。広島

島の映画は、罪深い

人間に腹が立つ。他

人事ではない「核災」。

みんな目を覚ましてほしい。

☆広島と長崎に落とされた原子爆弾は恐ろしい。その光景の絵、

恐ろしい。世界からこの爆弾をなくして

欲しいと切に願います。南西諸島の問題

も大変です。沖縄以外の島でも色々大変なことが起こっているのですね。知りませんでした。

☆軍縮が今や軍拡へと世界中が傾いている。「核を持っていることが自国を守る手段」が政治の常識になっている異常さ。この流れをどうしたら変えられるのでしょうか。「国」を守ることも生命、

暮らしを守ることに主眼を置いた政策をつくる人を選挙で選びたいけど...

報告・京都教区正義と平和協議会



お知らせ

司 教

大塚司教の予定

最新の情報は京都司教区のホームページにてご確認ください。



教区・大阪高松教会管区

教会学校研修会「祈りを学ぶ」

日 時：10月17日④ 10:30～15:00(10:00受付)

場 所：河原町カトリック会館大ホール

講 師：北村 善朗師(京都教区)

対 象：教会学校リーダー、活動に関心のある方

問合せ：信仰教育委員会 FAX/075-366-6679

メール/shinko_kyouiku@kyoto.catholic.jp

「差別が冤罪を生む」

日 時：10月17日④ 13:30～16:30

場 所：スクラファミリア3F大聖堂(大阪梅田教会)

講 師：徳田靖之さん(弁護士)

訓 覇 浩さん(真宗大谷派住職・大学非常勤講師)

問合せ：大阪高松教会管区部落差別人権活動センター

075-223-3340 bukatsu@kyoto.catholic.jp

■教区時報12月号の原稿締切日は10月25日④

ブロック・小教区

浦上キリシタン流配碑建立100周年 ミサ・講演会

日 時：11月3日④⑤ 9:30 ミサ

場 所：大和郡山教会 大和郡山市城南町1-33

記念ミサ司式：大塚喜直司教

記念講演「信教の自由と浦上信徒」

講師：シスター高木慶子(援助修道会)

問合せ：大和郡山教会FAXにて 0743-55-3036

皆さまのまわりに点訳版「京都教区時報」が必要な方がおられないでしょうか。点訳版「京都教区時報」をご希望の方がおられましたら、「点訳ネット・レジナ」笠松幸彦さんまでお申込みください。無料でお送りします。
Tel・Fax/072-722-0271

諸 団 体

カトリック看護協会京都支部 講演会

講 師：米田彰男神父(ドミニコ会)

日 時：10月18日④ 11:45～12:30

(米田神父司式主日ミサ 10:30～)

場 所：高野教会 京都市左京区東森ヶ前町7

参加費：500円 予約不要

問合せ：平野公子 075-712-3058

京都カトリック混声合唱団

10月11日④ 14:00 聖歌練習

10月24日④ 17:30 練習後ミサ奉仕

場 所：河原町教会聖堂 団員募集中

問合せ：則武 隆 075-951-4283

コーロ・チェレステ(女声コーラス)

練 習：10月8日④ 10:00 22日④ 10:00

場 所：河原町教会2階楽廊 新会員募集中

問合せ：駒井和子 075-561-5971

聴覚障がい者の会・京都グループ「教会訪問」

日 時：10月20日④ 10:00～15:00

場 所：唐崎教会(教会訪問、手話ミサ)

参加費：無料 各自昼食持参

(申込不要・現地集合 手話能力にかかわらずどなたでもご参加ください)

問合せ：鎌田 修 090-1967-5636

kamadaosamu@gmail.com

心のともしび

ラジオ番組案内(全国34局で放送)

10月主テーマ「言葉の重み」

KBS京都 ④～⑤ 朝5:55 ⑤ 朝5:15

ラジオ関西 ④～⑤ 朝5:00 ⑤ 朝6:05

毎日放送 ④～⑤ 朝5:45 ⑤ 朝4:55

カトリック京都働く人の家

読書会・遠藤周作「イエスの生涯」

日 時：10月11日④

九条教会9時ミサ後

場 所：九条教会内働く人の家

対象者：どなたでも

問合せ：瀧野正三郎 090-8207-1831



「ロザリオの集い」のお誘い

10月3日④12時より望洋庵にて、望洋庵との合同企画で「ロザリオの集い」を行います。

「ロザリオの祈り」と聞くと少し堅いイメージがあるかもしれませんが、今回はみんなで楽しく、日本語だけでなく、英語やスペイン語、ベトナム語など、参加する青年達のゆかりのある言葉を使って、ロザリオの祈りを捧げます。

「外国語はさっぱり分からない…」という方も全く心配いりません。ただ耳を傾けて言葉の響きを感じるだけでも、心が落ち着く時間になりますよ。初めての方やロザリオになじみがない方も、安心してご参加ください!

世界とのつながりを感じながら、みんなで一緒に温かい祈りのひとときを過ごしませんか? お祈りだけでなく、みんなでご飯を作ってワイワイしたり、神父様のお話も予定していますよ♪ 青年の皆さん、ぜひ気軽にご参加ください。お待ちしております!

河原町教会 橋本仁子

